

# 明治天皇崩御と御製（上）

大倉精神文化研究所専任研究員

打越孝明

目次

- 一、はじめに
- 二、明治天皇崩御と御製（以上本号）
- 三、明治天皇崩御と歌話（以下次号）
- 四、おわりに

## 一、はじめに

明治四十五年（一九一二）七月三十日、明治天皇は崩御された。その直後から、新聞各紙や諸雑誌や種々の単行本などが明治天皇の果たされた功績を、政治・軍事・経済・教育・芸術など様々な面から大いに讃えたことは言うまでもない。そして、天皇の御製についても多くの紙誌面が割かれた。明治天皇が立憲君主として激動の明治日本に君臨する一方、十萬首にも及ぶ膨大な数の御製を遺されたことを思えば、それは当然のことであった。「稀に見奉る歌聖」<sup>①</sup>

と評される明治天皇は、歴代天皇の中でもその御製の数が群を抜いており、古今のあらゆる歌人と比べてみても、その数は一頭地を抜いていた。

各紙誌等の記事の内容は大変豊富で、例えば、天皇の歌道師範役であった御歌所長の高崎正風をめぐる逸話、天皇が歌道にいかにも励精されていたかを示す逸話、具体的な御製を採り上げての歌話、そして数多くの御製の紹介等、崩御時の諸文献への興味は尽きることがない。当時の日本国民にとって、御製は天皇の生の声が唯一直接に伝わってくるものであったから、大いに関心を呼んだのであった。

本論考では、明治天皇崩御にあたり、新聞各紙・諸雑誌や種々の単行本の中の御製関係の記事を収集、再構成することで、当時の国民にとって天皇の御製がどのような意義を有していたのか、あるいは歌道に励精される天皇の御姿はどのような形で国民に知らされ、国民はそれらを通してどのような明治天皇像を描くことができたのか等について検証したい。

現在、我々が拝誦することのできる明治天皇の御製総数は、明治神宮刊『新輯明治天皇御集』（昭和三十九年）に収められた八千九百三十六首である。<sup>(2)</sup> 明治天皇がそのご生涯に遺された御製の総数は九万三千三十二首とされるから、この数はその十分の一にも満たない。しかし、後述するように、天皇崩御時、御製であるとして知られていたのが五百首程度であったことを考えると、現在は明治天皇の御製を研究する上で、大変恵まれた環境の下にあると言える。<sup>(3)</sup> しかし、残念ながら現実的には「学問的研究が未着手といつてよい状態」である。<sup>(4)</sup> 今日、明治天皇の御製をめぐる研究が振るわない大きな要因は、昭和戦前・戦中期の極端な反動として、天皇や皇室に関わるものなるべく遠ざけて、それらを真摯な学問的議論の俎上にさえのせるのを避けようとする戦後の風潮や、<sup>(5)</sup> 五七五七七の短歌である御製は文学の研究領域に属するもので、歴史研究には馴染まないという牢固な通念から、歴史史料として殆ど用いられていないことなどにあるように思われる。そして、文学の領域でも明治天皇の御製は、戦後はほとんど研究の対象になつて

いないという状態である。<sup>(6)</sup>

そもそも、明治天皇の御製は、我々が接することのできる唯一の天皇の著述といえるものであって、それらを抜きにして明治天皇を真に理解することは不可能であり、ひいては明治時代の確な理解もおぼつかなくなる。歌人の木俣修は次のように語っている。

歌数だけで歌人の価値を決定することはできないにしても、生涯に十万の作をなしたという歌人は古今を通じて明治天皇ただお一人であるといつてよい。しかもそれは風流韻事をこととしている閑人ならいざしらず、新日本建設のためにあらゆる困難をなしたとげた帝王の座にあつての仕事であつた。その繁忙は想像を絶するほどのものであつたと思うのであるが、そのなかで超人的なこの歌人として業績をのこされているということは偉大なことであるといわなければならぬ。<sup>(7)</sup>（中略）明治天皇の御事蹟を研究する面はさまざまにあらうが、歌人としての面を探ることなくしては、その人間を知ることは一歩たりともできないであらうと、私は思つてゐる。<sup>(8)</sup>

至言だと思う。ドナルド・キーンも「明治天皇を知る一つの方法は天皇の御製を読むこと」であり、それら御製について「そこには天皇の自伝的な興味の片鱗なりとも含まれているし、祈りに触れての天皇のお気持もうかがうことが出来る」とするのは、正鵠を射ている。

本研究は、我が国の近現代史の大きな分岐点である明治天皇崩御という時点に焦点を当てて、天皇の御製の果たした役割や及ぼした影響について探究するものであり、今後の明治天皇の御製の研究に取り組む上での前提と位置づけたい。

## 二、明治天皇崩御と御製

御製の紹介のされ方はおおよそ二つに分類できる。一つは、原則として解説を交えずに御製を列挙するもの。いわば明治天皇の「御製集」である。いま一つは、解説を交えつつ御製を紹介するもの。いわば明治天皇の「御製謹解」である。ここでは、明治天皇や御製をめぐって様々な歌話が語られることも多い。

### (一) 崩御時における御製の紹介

新聞各紙は崩御直後から御製の紹介に努めている。「御製集」としてまとめている場合もあれば、歌話の中で列挙している場合もある。以下、それらのうちで主なものを紹介する(月を表示していないものはいずれも八月である)。

『時事新報』は、二日から二十七日までの二十四回にわたって「御和歌」という連載を組み、そこで数多くの御製が紹介されている。例えば、四日および五日には新年歌御会始の御製四十首、七日および八日には「夏の御製」計四十二首、十二日には「秋の御製」二十二首、十三日には「戦時に於ける御製」二十九首、十六日には「折にふれたる御詠、事に寄せたる御述懐」四十二首、十八日には御父孝明天皇への「御至孝」や国民への「御教」等の三十七首、十九日には「御懐郷」や「御至言」の御製十八首、二十日には「冬の御題詠」二十首、二十一日には「春の御題詠」十八首、二十二日には「万象を御題にて詠ぜられたる御製」三十三首を紹介している。二十三日には「賢良御追懐」の御製五首および「首夏の御題詠」等二十八首、二十七日には「和歌を詠ぜられたる御製」等九首を紹介する、といった具合である。<sup>(10)</sup>

『国民新聞』は、七月三十一日の「先帝陛下の御文徳」で「大御心」や「皇祖皇宗を尊崇し諸神を敬し国を思召さるゝこと」や「国民を思ひ玉ふこと」などの御製四十三首を紹介している。二日には井上通泰氏謹話「御製の徳」の中で、「頗る下情に通ぜさせられた」ものや「私共の歌訓として日夕拝誦す可きもの」など二十一首を紹介している。六日から連日「先帝御製」の連載が始まり、原則として一日御製十二首ずつを紹介。八月中だけでも、その連載は二十六回に及んでいる<sup>(11)</sup>。

『日本』は、七月三十一日の井上通泰談「先帝の御製」の中で、「文学的なる叙景体のもの」や「極めて下情に通じ給へりと思はるゝ御詠」や「家人の日夜拝誦して然るもの」などの御製二十二首が紹介されている。九日の佐々木信綱談「先帝の歌風」の中では、「四時の風物に就いての御製」や「教訓的の御製」が八首紹介されている。十日からは、ほぼ連日「先帝の御製」と題して一日五首ずつ御製を連載、二十日までで十回を数えている<sup>(12)</sup>。

『東京日日新聞』は、七月三十一日の「御治世四十有六年」の文中のところで一首ずつ御製を挿入し、計十八首を紹介している。八月一日の「明治五年以来先帝新年御製」では三十八首紹介している<sup>(13)</sup>。『東京朝日新聞』は、五日には「大行天皇御製」二百五十九首を一挙に掲載した<sup>(14)</sup>。『中外商業新報』は七月三十一日に御製二十首を掲載している。二日と三日にかけて「故高崎正風選」の「歌道に関する」御製二十首を紹介<sup>(15)</sup>。『都新聞』は、一日から三日にかけての連載、井上通泰博士「先帝の御製（一）」（三）の中で、「文学的の御製」や「下情に通じ給ひし」ものや「歌人の殊に日夕拝誦して然るべき御製」や「万機御励精を拜し奉る御製」など御製二十二首を紹介している<sup>(16)</sup>。『読売新聞』は、七月三十日に「御製」十首を掲載している<sup>(17)</sup>。『中外日報』は三日に二十二首、十一日に先帝最後の御製一首を掲載している<sup>(18)</sup>。

諸雑誌も「御製集」の掲載に努めた。『国民雑誌』は、御製二首「とこしへに民安かれと祈るなるわか世をまもれ伊勢の大神」「いにしへのふみ見る度に思ふかなおのか治むる国はいかにと」を表紙に掲載した他、本文中で「明治

大帝御製集」と題して二百三十八首を掲載した。<sup>(19)</sup>

『実業之日本』は、「東京朝日新聞に依る」として二百六十四首を一挙に掲載。<sup>(20)</sup>『地球』は、「大行天皇御製」と題し、「大君の御心をうかがひ奉るには」「教育の事忽にすなとの思召」「御製の中より故高崎男が歌道のかぐみとも見奉りて選みたる二十首あり」「御歌所を置かせられてよりの新年の御製」などの分類のもとに、計百四十三首を掲載。<sup>(21)</sup>『新日本』は「御製六十一首」と題して掲載。<sup>(22)</sup>『大八洲』は、「明治天皇御製 歌の心を詠したまへる御製」と題して五十四首を掲載した。<sup>(23)</sup>

『教育時論』は、「明治五年以来の先帝新年御製」と題して三十八首、また新聞『日本』掲載のものとと思われる「最近の御製なりと漏れ承る」二十五首を紹介した。<sup>(24)</sup>『中学世界』は、「御製の中より」として三十四首を掲載。<sup>(25)</sup>『学生』は、「初の方は、聖徳を伺ふべきものを録し、次に国民の教訓となるべきものを録し、終の方には、自然に對して詩人的御性情の流露せるものを録せり」として御製四十首を掲載した。<sup>(26)</sup>『兵庫教育』は、「明治天皇御製」として二百十二首を掲載した。<sup>(27)</sup>

明治天皇御一代記等の単行本の一部が御製集になっている場合も多い。金光教本部『聖徳の無窮』は、冒頭部分に御製三十一首を掲載。その他、本文中にも御製の掲載がある。高桑駒吉『明治聖代志』は三百三十二首を掲載。<sup>(28)</sup>須藤光暉『明治天皇御伝』は、冒頭の歌会始の御製四十一首から始まり、計四百八十八首を掲載している。<sup>(29)</sup>

『明治天皇聖徳録』第三十編の「御製」の項は全体が御製集になっていて、四百十八首掲載。この他第二十二編の「御文徳」の項には、例えば「まことの道」の分類で二十九首、「教訓の御製」の分類で十三首、「新年御詠」の分類で四十二首など、一括して御製が掲載されている。<sup>(31)</sup>

一冊の単行本の体裁で刊行された明治天皇御製集の中で、おそらく最も早いものは、大日本歌道奨励会『明治余光』であろう。奥付を見ると「大正元年八月二十日発行」となっている。<sup>(32)</sup>収録した御製総数は、この頃刊行された御

製集の中では最大数を誇る。<sup>(33)</sup> 春の部百三十八首、夏の部七十一首、秋の部二十八首、冬の部二十九首、感懐の部八十四首、人事之部三十二首、軍事の部二十三首、教育の部二十首、歌の部二十二首、詠物の部四十首、天象の部六十五首、新年勅題の部四十一首の計五百九十三首を収録する。

『明治天皇大御歌 やまとにしき』（大正元年九月・中外商業新報社）は、『中外商業新報』九月十三日号附録の小冊子で、同紙上には崩御直後から第一面に「敷島の道は遠く且つ長し、先帝の御製を拝誦せば意匠雄大、結構壯宕、天地に連り古今に亘る。御製凡そ九万首、其御思想の豊にして御文藻の深き拝察するに余りあり、吾社は来る九月十三日の御大喪の当日、謹みて御製を拝収したる一大附録を添附し之を読者に頒つべし、乃ち用紙印刷等最も意を用ゐ、意匠と体裁と之を一冊子として保存に堪へしめ、以て伝世の宝とすべく以て諷詠の師とすべく、以て文教涵養の源泉たらしめんことを期す、嗟呼先帝既に神去りたまひ、今にして龍体を偲び奉らんとすれば、涙自から湧ひて聖容貌たり、乃ち御製を幾万斯年に伝へて聊か草莽の微誠を布き、読者と俱に日夕の瞻仰に資せんと欲す、右予じめ告ぐ」との刊行の予告が出されていた（八月七日～十日）。収録御製は、神祇部十五首、国事部四十一首、軍事部二十六首、人事部五十三首、新年部十三首、四季部百三十三首、雑部七十九首、歌道部二十九首の計三百八十九首。

西脇静編纂兼揮毫『明治天皇御製帖』（大正元年十月・松邑三松堂）は、御製百首が墨書されて掲載されている。

『明治天皇御製 神の訓』（大正二年・大阪朝日新聞）は、『大阪朝日新聞』大正二年一月一日号の附録で、巻末に「右 明治天皇御製五百首恭しく題して 神の訓と曰へるは篇々訓誥なるを以てなり謹んで読者に頒つは仰慕感恋の情を慰めん為なり願くは読者諸君朝に夕に諷誦服膺して深く 宝訓を銘し以て忠誠を養はんことを」と記されている。収録御製数は五百首。

この他、この時期単行本として刊行された主な御製集は以下の通り。『明治天皇御製集』（趣味社）は、『御製三百数十首御公表せられたる殆んど全部網羅』（『東京朝日新聞』大正元年八月十四日広告）とか、「明治天皇の御製は陸

下が物に触れ事に感じ給ひしまにまに大御心を尽して歌ひ給へるものにして御詔勅にも優りて真に大御心に接し得るものなり。吾等国民たるものは日夕拝誦すべきものたるは論なく復永く記念として戸々必ず具ふべき至宝たり。特に読者のため季雑を分類し校正厳密なり」(『趣味』第六卷三号〔大正元年九月〕 広告) とか、同書が「鹿野千代夫謹編」で「先帝御製、春四十二首、夏五十九首、秋十九首、冬二十六首、雑百七十七首を集め」(『ホトトギス』第十五卷十二号〔大正元年九月〕 九六頁) などの紹介がなされている。「明治天皇御製歌集」(大正元年八月・楽園社) は、「大帝宝算十六歳を数へ給ひし明治二年より明治聖代の御末迄四十個年(34)に亘る御製作五百首」を輯めたもの。また、加藤玄智編『明治・大正・昭和 神道書籍目録』によれば、田山宗堯『明治御製集』(大正元年八月・ともゑ商会) も刊行されている。

## (二) 崩御時における「御製謹解」

### (1) 新聞各紙および諸雑誌等での「御製謹解」

崩御時の新聞各紙や諸雑誌等では、様々に御製の謹解が試みられている。ここでは、御製の意味をとり、その背景を踏まえながら執筆者の感慨などが綴られた。それらの中から印象的ないくつかを以下に紹介してみたい。

御歌所で参候を務めていた長谷信成の一文は簡潔な文体で御製を謹解しているものの代表例で、その一言一言に万感の思いが込められている。

「とこしへに民やすかれと祈るなるわが世を守れ伊勢の大神」是れ実に 陛下最高最深の御祈願なりしなり、「大空にそびえて見ゆる高ねマものほればのぼるみちはありけり」の歌を拝誦して誰か感奮激励せざるものぞ「燕飛びかげのみ見えて田植時家に人なき小山田の里」「児等はみな軍のにはに出で果て、翁や独り小田守ららむ」



名もなき民草を懐ふ大御心の程は御製の上に最も明かなり「瓜畑におりたつ人の見ゆるかなしづが垣根の夏の夜の月」野趣掬すべきに非ずや「庭草に水そ、がせて月を待つ夏のゆふべは思ふことなし」涼風静に湧くの感あり「白露のかせにこぼる、かずみえて朝日す、しき竹の下いほ」清寂骨に徹す「天をうらみ人をとがむることもあらじわがあやまちをおもひかへさば」三拝して左右の銘となすべく「をちこちに居花イハなみよるかげ見えて月すむ野辺に秋風ぞ吹く」実景見るが如し「さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり」何等の高調ぞ、何等の教訓ぞ天津日影と光を争ふ程の明主に非ざるよりは夢歌ひ得べき歌には非じ「四方の海みなはらからと思ふよになど浪風のたちさはぐらむ」聖徳如海、慈海無涯唯々拝誦して徳恩の濃かなるを感ずるのみ、<sup>35</sup>次は、「国民新聞」紙上の徳富蘇峰「先帝御聖徳一斑」に見る謹解。簡潔な文章の中から崩御を悼む蘇峰の気持ちが惻々と伝わってくる。

古の文見る度に思ふ哉己か治むる国は如何にと

是れ 陛下二十余歳の御製也。如何にも帝王として自然に湧き出でたる御心の儘を詠出し給ひたるやに拝見す。

とる棹の心永くも漕ぎ寄せむ葦間の小舟障りありとも

如何に 陛下の堅忍不拔の御精神の活躍するを見ずや。

空蟬の世は安らかに治まりぬ朕をたすくる臣の力に

是れ 陛下が勲臣を待ち給ふ優渥の証也。(中略)

おのかし、つとめをおへて後にこそ花の蔭には立つ可かりけり

されど 陛下は、遂ひに花蔭に御立ちの違あらせずして、上天し給へり。哀哉。<sup>36</sup>

『中外日報』紙上では、崩御前の七月二十八日の時点で綴られた「御聖徳」と題する御製謹解が掲載された。

星のとぶかけのみ見えて夏の夜もふけゆく空はさびしかりけり

とは聖上の御製である。かしこくも陛下御大患にわたらせられ、愁雲九重の天を被ひ 陛下の赤子は、皆至誠以て御平癒を祈り奉り、一日も早く御全快あらんことを祈りつゝ、あり、予また御平癒を祈りて、深夜、大空を仰げばいとゞさびしさを感ず。

今上陛下には、実に吾国未曾有の変転期に遭遇し給ひ、その御聖明や、万機を克く御処理ありけるは、万人の仰ぎ奉れる所なり。

而して陛下が、下万民を愛し給ふ大御心の深き、自然にその御製に現れたるぞかしこき。

人はたゞ誠の道を守らなむたかきいやしきしなはありとも

貴賤貧富を問はず、誠の道を守るべきものぞと教へ給ひ、或は又

うつせみの世はやすらかにをさまりぬわれをたすくる臣の力に

と、或は又

ちはやふる神の心になふらむわがくにたみのつくす誠は

国民は一つ心にまもりけり遠つみおやの神のをしへを

と、かくまでに、国民の力を賞したまひけり、又た世のひらけゆくをよろこばせたまひ、

天の下にきはふ世こそたのしけれ山の奥まで道のひらけて

と、詠ませたまひ、又国政の上に大御心を寄せたまひては、

未ついにならざらめやは国の為め民の為めにとわが思ふこと

とあり、天空海闊的に大御心を保たまく思したまひては、

あさみどりすみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

とあり、又わが国民の、円満に進みゆくをよろこびたまひては、

もろともたすけあひつ、国民のむつびあふ世ぞたのしかりける  
と、詠ませられ、道徳教育に大御心を注がせたまひては、

目にもえぬ神にむかひて愧ぢざるは人の心のまことなりけり

と教訓したまひたり。前にもいへる如く、陛下が臣民をあはれみ給ふは、誠にしるきこととなるが、わけて下層のものどもを、思ひ給はるぞかしこし。

桐火桶かきなでながら思ふかなすきまおほかる賤が伏屋を

とこしへに民やすかれといのるなるわが世をまもれ伊勢の大神

てるにつけくもるにつけておもふかなわがたみくさの上はいかにと

なつの夜もねさめかちにてあかしけるよのため思ふ事多くして

あつしともいはれざりけりにえかへる水田にたてる賤をおもへば

賤が住むわらやのさまをみてぞおもふあめかぜあらし時はいかにと

臣民皆、何事をも忘れて、御平癒をいのり奉るも道理なり。われもまた恐れ多けれども、一身を神に捧げて、御

わざはひに代らんと祈りつ、あり。ねがはくば、御製の

ほと、ぎすなく一声のうれしさにいまみし夢をわすれけるかな

とある、そのほと、ぎすの声と共に、御夢を忘れたまひけん如くに、御悩みを忘れたまひて、御平癒あれかし。

謹みて祈り奉る。<sup>37</sup>

『時事新報』の連載「御和歌」では、職種を異にする有識者がその特徴を出しながら御製の謹解を試みている。例えば、連載の第六回は宗教学者の姉崎正治の文章で、御製は神道の真髓を的確に言い表しているばかりでなく、そこで表明されている信仰への姿勢はあらゆる宗派に通じるものである、との論旨を展開している。

言の葉の誠　従来世に公になつて居る先帝陛下の御和歌を拝誦するに敷嶋の道と云ふことを、単に歌を詠む道と云ふことでなしに何処までも人の心の誠を主とし、それより及んで人生の真を謳う道であると始終御覧になつてあらせられたやうに思ふ、其御意味が明かに御詠の中に顕はれて居る、例へば

ふむ人はあまたあれとも言の葉の道のたかねをたれかこゆらむ

と御製あそばされたる如き即ち言の葉の道と云ふものは心の誠である、其誠こそ天地神明を通ずる大道である、その心が自から言葉に出づればそれが歌になるのである。若しも此誠を外にして詠むならばそれは歌ではなく、いたづら言であると思ふ意味であらうと思ふ、而も陛下には爾う云ふことを別に理屈がましく御考へになるのではなく其御趣意が自然大御心より湧き出で、居るやうに拝見せらるゝのである、そこに所謂歌は神代以来の道であると云ふ意味も顕はれて来るのであらう

神道と叡慮　一体神道と云ふことに就ては人々に因つていろいろの考へもあらうが私の考へでは神道の信仰は殊に日本民族の古来の信仰である併しそれは単に昔からの信仰であると云ふばかりでなしに、人間の極めてうぶな精神を其儘承継いで居ると云ふ点に神道の神道たる所以があると思つて居る、即ち理屈や計算から割り出した信仰でなしに天地の変化、日月の運行、或は四季折々の変化其他天地宇内の万象人間世界の有らゆる事柄に就ても、極めてうぶな心を以て相對する、さうして此世の総ての事柄は偶然に起るのではなく所謂神慮であると云ふやうに解釈し、且つ爾く信仰するのである。陛下の御製を拝見するにその大御心は、神道の真髓に到り尽して御在になる、そこで其大御心が自ら御歌となつて顕はるゝのであらう従つて言葉を飾るばかりが強ち敷嶋の道ではないと云ふ叡慮であらせられたやうに拝察せらるゝ、又御製に

眼に見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけれ

と遊ばされたのを拝しても此意味が顯著に表はれて居ると信するのである

信仰の神髓

眼にぬ見え神と云ふことは信仰の中心であつて、何れの宗教でも道徳でも眼に見えぬ神に対する

信仰と云ふものがなければ、人の心の誠と云ふものは出て来ない、得手勝手の考へで神を拝み或は遙かに遠い天国とか極楽世界に在るとか云ふ神を拝むのでなしに自分の心の奥底に直ちに神の御心が顕はれる、それが則ち神の心に通ふと云ふことであるやうに思はれる、人の心の誠は人自らの心で造り出すものでなしに此神の心に通ふ所の誠の顕れである。従て又誠の心の中には神の心も顕はれる、神の力も加つて来る、之が総ての宗教道徳の最も深い処、又何れの宗教道徳に通じても変らぬ中心であると信ずる、勿論斯様に自個の見解を以て御製を推し量り奉るは恐れ多い極みではあるが、私は常に御製を拝する毎にいかにも大御心の誠てふ御経験が直ちに天真流露の御歌となつて顕はれたやうに拝して居つたのであるから敢てかく申し奉る次第であるされば私は宗教の説明をする場合には何れの宗派の人に対してもいつも此御製を引用して信仰の神髓は此外に無いと云ふことを説明して居るのである。<sup>38)</sup>

連載第十三回目で海軍中將の八代六郎は、「從來漏れ聞えて居つた御製中、如何にも有難いと思つた御歌十五首を詔勅、勅諭と共に小冊子に蒐め『眷々服膺』と題して既に数千部を軍人大学生其他の知人共に頒与」し、自らも「之を始終懐から離さず暇さへあれば拝誦して所謂大御心をば眷々服膺しまつらんと力めて居つた」として、それら十五首の御製を紹介するとともに、御製の特徴について「陛下にはどこまでも天皇の大権を我有と云ふやうな思召は更になく、皇祖皇宗のおきて給ふたところに従つて日本の国土の統治の任に当るのであるぞとの叡慮が、明らかに拝察される、其上に仁慈、剛堅、忍耐、義侠、勇武、博愛、同情等の御美德が窺はれそしていかにも緻密な注意深い御資質が顕はれて居る（中略）『あさみとり』に『さしのほる朝日』の大御歌の如き、これまでも航海中ひろびろとした蒼天を仰ぐとき、或は波の上に朝暉の光を投げるとき共に其雄渾壮大なる景色を見ては畏れ入つた御製と拝して居つたが今日にして惟へば陛下の大御心が実に此通り爽快にあらせられたのである、しづかなる日には舵に心をゆるすなの

御製の如き航海者は幾度かその実例に遭遇するだけに驚歎し奉ることも一層切である」などと、海軍軍人としての航海中の体験を踏まえながら論じている。実体験を背景とした謹解であるだけに、味わい深い文章である。<sup>39)</sup>

連載の十九回目は、近年の大洪水という出来事を思い返しつづ御製の謹解を試みたもの。「明治四十三年八月中旬霖雨うちつゞきて東京市并に附近各県に稀有の大洪水あり蕭殺の気天地に漲り、雨は歇まず風は荒める中を避難に救済に街路の水を越えて右往左往するもの連日連夜に及び人々安き心もなかりき」と過去の実際の出来事を背景として紹介してから、具体的にその折に詠まれた御製「水こえし里のしめりけはくへく秋のみそらよはれつゝ、かなん」を紹介し、この御製に接する者で「洪水に苦む民のために晴天を祈らせ給ふ大御心のほど明かに拝察せられて感泣」しないものではなく、二年後の今日、天皇崩御という現実<sup>40)</sup>に直面したことに筆は及び「昼夜感慨無量、又悼み奉るの辞なし」と結ぶのである。

『少女画報』では、高島平三郎が六首の御製を取り上げ少女向けの易しい謹解を試みている。次に引用するのはそのうちの一部。

その（＝明治天皇の、執筆者註）お歌には、畏くも古の歌聖も及ばぬ御名歌多くおはし、而かも御製にして人倫道徳に關せぬものは殆ど無いといふてもよいほどです。今少女たる皆様の教訓となるべき御製一つ二つを拝誦いたしませう。

たちねの庭のおしへは狭けれど広き世に立つもととはなれ

畏ければ真に陛下の仰せの通り、皆様の御両親の御教訓は、学校でお習ひになることなどに比べたら狭いでせう。併しながらこの親の教こそ世に立つもととなるのです。世に立つには智識も必要ですが品性が第一です。家庭と御両親からの教がそのもととなるのですから、必ず之を忘れぬやうにせねばなりません。<sup>41)</sup>

(2) 単行本での「御製謹解集」

『明治天皇御製謹解』（大正元年八月）は、渡辺新三郎著で実業之日本社から刊行された。奥付を見ると、八月十五日発行となつてゐるので、天皇崩御後に出た単行本の「御製謹解集」としては最も早いものかもしれない。崩御後に執筆の準備を始めたとは考えにくく、事前に刊行する意図で、ある程度執筆してゐたと思われる。

刊行の目印として著者は、明治天皇の「赫々たる鴻業と盛徳とは、常にこれらの御製によりて窺ひ奉ることを得ると同時に、首首おのづから冒し難き帝威と限りなき君徳との備はりて、偉大なる聖訓の溢るるを拝する」が、御製には「玉調の高き、俚耳に入り易からざるもの少からず」あるので、「今斯くゆくりなく大故に遭ひ、惶感哀痛、世を挙げて旦暮ただ御遺徳を追慕し奉るに当り、これらの御製を奉積して、洽く余光に浴せしむるの要ある」と考へて執筆した、としてゐる。<sup>(42)</sup>

その内容は「明治天皇の御製中洩れ承はれるもの四百五首を謹撰して、每首その大意を附し、なほ語句には略解をも添へ」たもの。四百五首の内訳は、新年十三首、春三十四首、夏六十三首、秋二十二首、冬二十九首、雑二百四十首である。「一般同胞に対し、御製に含まれたる聖意を伝へん事を主とせるが故に、解釈は第一に大意要点を明にするに力め、一首の大意に比較的関係少き語句の解釈はなるべく省略」したとあるように、<sup>(43)</sup> 文法や語法の詳しい説明は少なく、一首の解説の量も多くはない。また、著者の感慨等が述べられることも少ない。例えば、冒頭の明治三十五年歌御会始の御製「たちかへる年の朝日の梅の花かをりそめたり雪間ながらに」に対しては、「一陽来復、年はあらたになれるあした、さし渡る初日の影の麗かさに、梢にはまだ雪が残つて居るが、梅はその艶なる唇を發いて薫じ初めた事よとの意」と謹解する。<sup>(44)</sup>

こうした大意のみではなく、時に著者が自らの感慨等を開陳した箇所もある。いくつかを摘記してみると、例えば、「日はいまだ長からねども春立つとおもふ心ぞのどけかりける」を解して、「一首の整調まことに流麗で、拝誦すれば

春光霽々たる和風の中に立つ思ひがせられる」とし、「傍の人の言ふこと聞きとれず蟬のこゑのみ耳にひびきて」を解して、「実境手近き事ながら、いまだ人の言ひ得ざりし所であるのを、やすやすと詠ませられてある」とし、「庭草に水そそがせて月を待つ夏のゆふべは思ふことなし」を解しては、「ただこの暫しの楽しさは、上下貴賤の別もないことと挿せられる」とするなどしている。<sup>(45)</sup>

また、御製の詠まれた年月の明示を行つていて、例えば「賤が住む藁屋のさまを見てぞ思ふ雨風あらしときは如何にと」は「明治三十七年八月十日」であり、「夏の夜も寝覚めがちにぞ明かしける世の為おもふこと多くして」は「明治三十七年八月八日」であり、「時の間にすずりの水のかわくにも今日のおつさのしらられるかな」は「明治三十七年の九月二十五日」であろう、などとしている。<sup>(46)</sup>

『玉の御声』（大正元年九月）は、国語学者の山田孝雄が著したものの。明治天皇の「御製謹解集」として刊行された単行本としては、やはり最も早く刊行されたものの一つで、充実した内容である。著者によれば、本書はもともと「雑誌『教育の実際』の為に草し来りし玉の御声を集めて一冊子としたるもの」であり、同誌への連載は「明治四十四年三月号よりして、大正元年八月号」で、「御製八十七首」を採り上げたが、「今百の数にみたしめんとして、別に新に稿を起して加へたるもの十四首」であり、計「二百一首」の御製を謹解した、という。<sup>(47)</sup> 当初の計画では「今年の十一月には天長節のよき日を以て、御製の数、百に満つるを待ちて、先之を一冊に集めて」刊行する予定であったといふから、明治の御代は終焉したとはいえ、ほぼ予定していた時期の刊行であったことになる。<sup>(48)</sup>

その内容は、国語学者らしく用語や文法の解説にかなり意を用いたり、あるいは中国の故事典籍を引いたり、実際の教育に携わる人々への配慮が窺われる。その中から著者の書きぶりを象徴的に示す一節を以下に掲げておく。

大空にそびえて見ゆる高ねにものばればのぼる道はありけり

時正に登山の好季。且御製を拝誦して処世の指鍼ともせよかしと思ひてこゝに掲げ奉りぬ。



「大空にそびえてみゆる」はよそながら見られたるさまの語なり。よそ目には及びもなしとおほゆる高峯（「ネ」は「ミネ」といふに同じ）にも登らむと思ひて、登れば登るべき道ありて、其の道を踏みば頂にも達せらるべきをよませ賜へるなり。「ありけり」の「けり」をば或は咏嘆の「けり」といへり。これ普通の「けり」と別にあらねど用ゐる場合の異なるによりてなり。かゝる時には「あつたわい」といふ如くに、回顧して自ら感情を表はすに用ゐらるゝなり。

この御製を拜誦するものは、先自暴自棄を戒めよ。凡そ事如何に難く見ゆるものも、行へば行ふことを得るものなるをさとさせ賜へるを思ふべし。孟子が「志ある者は事竟に成る」といへるも朱熹が「精神一たび到らば何事か成らざらむ」といへるも、皆この精神なり。されば難しと見ゆとも徒らに絶望すべきにあらず。必ずその目的に達すべき時あるを察むべし。

されど行かざれば進むこと能はざるは明なれば、躊躇せず発程すべし。孔子が

吾嘗終日不食終夜不寢以思無益不如学也。

といへる如く心に思ふのみにては实地にあらはれず。高山に登らむと思ふのみにては頂に達することなし。さりとして、一足飛びに達し得らるるものにもあらねば、それぞれの道に由りて進まずばあらず。これ即ち御製に「道はありけり」と宣へるなり。登山の事項たりといへども、道を誤りては達すべき筈のものも達せられずに終わるのみならず、甚しきは不意の禍を被ることあり。世に往々不測の禍に罹るものは大抵守るべき道を蔑にするによる。特に古来の経験より得來れる習慣の軽んずるが如きは最誠むべし。述者かつて郷国の名山立山に登りたる時己が軽率なるよりして瀕死の苦を嘗むるに至り、深く、古より伝へ來れる慣例の最も安全なる方法を規定せるものなることを親しく感じたり。かゝる事ここに述ぶるは畏多き事なれど、登山の人の心得の一にもとて己が恥をも顧みずにかくはものしつるなり。<sup>(49)</sup>

また、詠まれた年月日が確定できる御製は、その年月日を明記して読者の理解に便宜を与えようとしていることも本書で注目される点である。例えば、「いくさびといかなる野べにあかすらむ蚊の声しげくなれるこの夜を」のところで、「この御製は、かの日露戦役中八月八日に詠ませ賜へるなりと洩れ承る」と記し、「児らはみないくさのにはに出ではて、翁やひとり山田もるらむ」のところでは「こはかの日露戦役の酣なるころ明治三十七年九月二十五日によませ賜へる御製と伝へらる」と記している<sup>(50)</sup>。

『明治天皇御百首』（大正元年十二月）は、大阪毎日新聞社謹輯になるもの。刊行の辞で、本書は「明治天皇御登選後の始めての新正、今上陛下御踐祚後の始めての新年の記念」であり、その構成は「明治天皇御製二百首を謹輯し、恐れながら御製拝誦につきて一々註釈を附し、御製に關した明治天皇御聖徳の御事蹟を録して一部となし」たものであるとしている。刊行の目的は「唯だ御製を世に知らせる」ことのみにあるのではなく、「陛下が、人の心の誠は、敷嶋の道の言の葉、即ち歌にあらはれると仰せられた通り、陛下の大御心を直接に切実に国民が感じ奉り拝受し得るのは、此御製の外には無い故に、御製の内、陛下が皇祖皇宗の御遺訓を奉ぜられ、国を思ひ国民を思ひたまひし大御心の殊に著くあらはれたもの、申さば帝王道徳の意味のものを多く謹輯し、一の修身教科書とする」ことにあるとしている。本書のもたらすであろう効用としては「軍人に取りては義勇精神の鍛錬となるべく、教育家には、倫理修養の聖訓となるべく、政治家実業家あらゆる階級の国民に取りて、身を立て道を行ふ上に、鑑となるのである、若しまた一般夫婦兄弟親子の家庭に於ては、御百首の一事を拝誦しあひて、互に志を立て徳をみがくの基とすれば、一身一家の平和繁栄、必ず期して待つべしと信ず」と記している<sup>(51)</sup>。

「倫理修養の聖訓」の観点から御製を拝誦しようとする著者の意図が典型的に示されている実例として、例えば「家」の題の御製「ことそぎし昔の家のつくりさま今も田舎にのこりけるかな」の一節を挙げる事ができる。「手を省いた（ことそぎし）質素の造り方であつた昔の家が、今の大厦高樓の家の華美を競ふ世にも、田舎の方にはまだ残

つて居ることであるよ」との大意を示すとともに、「此御製は、教訓を詠ませたまふたのではないが、これを拝誦し奉ると、儉徳を養ふの教訓となる、戊申詔書の御主意をも拝察し奉らる、総て陛下の御製は、御教訓を詠ませられたのでなくとも、聖徳高きが故に、之を拝誦すると、それが自然に教訓として拝されるのである」との謹解を施している。<sup>(52)</sup>

歌人の武島又次郎は、歌道雑誌『わか竹』誌上に「聖詠謹釈」を連載した。<sup>(53)</sup>これらは、一冊の単行本として纏められたわけではないが、十七回の連載を一体の「御製謹解集」と見なしたい。それらは、崩御直後の専門歌人の手になる御製謹解として貴重なものである。

連載を行う目的については、「御製を集め奉り、また其中より際殊にすぐれさせ給へりと思はるゝものを註釈し奉りて、有り難き大御心を普く知らしめんとせる者が既に四五種世にでてゐる」が、「世人の出したる編著と自分の考へてゐる思想と相違する点がないでもない」ので、「今つぎつぎに御製より最深甚なる大御心のうかがはるゝもので、しかも金玉の響のあるものを撰び奉つて、簡単に解釈し奉らうと思ふ」と述べている。<sup>(54)</sup>『國學院雑誌』の中で武島は、崩御直後から各紙誌上に掲載された文章について「自分のげにもと感服して読んだものに至つては一篇もなかつた」と断じて、その理由を三つ指摘している。第一の理由は「純粹の文学批評家以外の人、例せば教育家とか、哲学者とか宗教家とか一言にして言へば文学詩歌から殆ど門外漢ともいふべき人の説が多く載せられてあつた」ことで、専門歌人の武島の見地からすれば、それらは「議論がとかく皮相に走つて中核を捕へ得ず」、したがつて「御製の真の御精神を發揮してゐるものは殆んど無い」という。第二に「批評の範圍が狭く、只御製を列挙するといふぐらゐの事で、それ以外に歴代の歌の聖の天皇、例せば順徳院とか後水尾院とかの御製に比較し奉るといふやうな比較研究などしたる者は一人もなかつた」こと。第三に「世間の批評は一般に浮薄であり軽佻であつた」こと。すなわち「御製と申せば何でも褒め奉ればよいものと心得て述べたやうな批評」であつたとして、御製を拝誦するうえでどのような姿勢で

臨むべきかについて、自らの見解を開陳する。

陛下は確に歌の天才でおありであつたには相違ないが、如何なる天才の作にも巧妙なるものもあり、又比較的  
に巧妙でないものもあると言ふまでもない。然るに世間の批評は陛下の御製としいへば、いかなるものでも、尺  
く深遠なる大御意のこもつたるもの、無量のお考の含蓄せられてあるもの、やうに考へて、只片はしからお褒め  
申してあるばかりである。陛下が御在世中、直諫を好ませられ、切言を快くお聴きあそばされた御<sup>マ</sup>大心よりして  
思ひ奉れば、かやうな追従的な批評ばかりでは恐らく一面から考へて御志に背き奉つたものと言はねばなるまい  
と思ふ。<sup>(55)</sup>

上記武島の指摘する従来の御製謹解に対する三点の批判を踏まえつつ、連載「聖詠謹釈」の内容の一部を以下に紹  
介してみたい。専門歌人としての武島の特徴が最もよく出ている事例として、例えば御製「水越えし里のしめりけか  
わくべく秋のみそらよ晴れつゝかなむ」の謹解では、そこに用いられた用語について、「殊に面白く感じ奉るのはし  
めりけといふ語で、極めて通俗なる言語であるやうなれど、卑俗でない限りは歌によみ入れてもさしつかへなしとい  
ふ景樹以来の説を容れ給へる大御心と察し奉るが、これにつきても歌には俗語を読みこむべからずなど狭い考をもつ  
のは僻見であるといふ事がわかる」と自らの見識を開陳している。<sup>(56)</sup>

歴代天皇と明治天皇の比較研究という点については、連載の冒頭で採り上げた明治天皇御製「とこしへに民安かれ  
と祈るなる我世をまもれ伊勢の大神」を謹解する中でそれを試みている。

代々の天皇が、又先帝と同じやうに民安かれと祈り給ふ事を治国の大本とせさせ給ひしは、さまざまの書に遺  
し給うた御歌にても知られる。光厳天皇のには

てりくもり寒きあつきも時として民に心のやすむまもなし

といふがあり、後醍醐天皇のには

世治り民安かれと祈るこそ吾身に尽きぬ思なりけれ

と仰せられたのがあり、後宇多天皇の御製にも

いとゞ又民安かれと祈るかな吾身世に立つ春の初は

とのたまはせたのがある。時代は変れども変らぬものは民を思ふ御代御代の帝の御心、誠にかしこき極みである。<sup>(57)</sup>安易な御製讃仰を誡めた事例としては、「事なしとゆるぶ心はなかなか讐あるよりも危ふかりけり」の御製の謹解の中で、類似する「世は泰く治りぬとて人皆のゆるぶ心ぞあだになるべき」の御製と比べると「恐れながら、前の方が一段立優つてあらせらるゝやうに拝察する」と明言している部分を挙げることができる。<sup>(58)</sup>

武島による謹解のいま一つの特徴として、西洋の詩学や古典学の豊かな教養を駆使して謹解を試みている点が指摘できよう。『國學院雜誌』の中で、明治天皇の「和歌につきての御考を述べさせ給ひし」御製を読むと、「陛下は実に詠歌の精神を以て『人のまごころ』『人の至誠』を表すにありとせられた」と述べた上で、武島は次のように語る。

日本や支那の議論はさて措きて西洋にありては古より詩につきての種々の学説が出で、あるはアリストートルの如く詩の精神は模擬 (Imitation) にありとする者、あるはアザリンの如く詩の目的は再現 (Representation) にありとする者、又はマツシユール、アーノールドの如く詩の本領は洞察 (Interpretation) にありとする者など様々に岐れてはきたが、いづれか人生の真即ちまことを捉ふるを以て詩の根本の精神とせぬ者はなかつたのである。陛下が此至誠即和歌の御論は別段これら西洋の学説をおまねになつたといふ訳でもないのに、御天才の結果和歌のこの根本精神を御神解になつたのは実に尊くありがたい事と思ふ。<sup>(59)</sup>

『わか竹』連載の中では、御製「積りては払ふが難くなりぬべし塵ばかりなる事と思へど」を謹解する中で、シェークスピアの「A little fire is quickly trodden out, which, being suffered, rivers can not quench. (少しの火はすぐにけしとめられるが、若しそのまゝにして置くと河流と雖も抑へる事ができなくなる)」を引用したりしている。<sup>(60)</sup>

- (1) 『報知新聞』七月三十日号夕刊三頁。
- (2) 同じ明治神宮刊の『類纂 新輯明治天皇御集』（平成二年）は、『新輯明治天皇御集』収載の御製を、神祇・皇室・邦国・軍事・人倫・精神・典教・人事・器物・時令・天文・氣象・地象・動物・植物の十五部門に分けて類纂したものであり、御製総数自体に変化はない。
- (3) 前掲『新輯明治天皇御集』序。
- (4) 岩井忠熊「明治天皇―「大帝」伝説」（平成九年・三省堂）一四七頁。岩井氏も「もともと広くまた長期間にわたって普及した」という理由で、大正十一年（一九二二）刊行で千六百八十七首を収める『明治天皇御集』（宮内省蔵版・文部省発行）を「主として」用い、戦後の二種の明治神宮刊行本を「参照」程度に扱っただけであるというから、近年の成果を必ずしも全面的に生かしているわけではない。
- (5) 筑波常治は「明治天皇が昭憲皇太后とともに、すぐれた歌人であったことはよく知られている。わたしたち戦争中に少年期をすごした世代には、この人々の御製は非常になじみがふかい。しかしそのなじみふかさは、たとえば君が代をはじめ種々の軍歌と共通するような、一種の反感をともしなう思い出につながったものである。そのせいかこの人々の作歌は戦後にはまったくかえりみられず、岩波文庫に収録されている『明治天皇御集』も『昭憲皇太后御集』も、このところながら絶版のまま放置されている」と述べている（『論争』第十九号〔昭和三十七年十一月〕二二―二頁・筑波常治「王者の孤独―御製にあらわれた明治天皇の生活と思想」）。
- (6) 戦後の明治天皇御製に関する著述は、戦前と比べると極端に少ない。『新輯明治天皇御集』が刊行されて、我々が拝誦することのできる御製数が飛躍的に増加し、『類纂 新輯明治天皇御集』の刊行により研究への厚い便宜がさらに与えられたのとは裏腹に、研究の現状は寥々としたものである。数少ない研究の中からいくつかを紹介すると以下の通り。筑波常治は「公表されている御製を手がかりにして、今後の本格的伝記づくりへのいわば踏み石として、御製をとおしてみた明治天皇の生活と思想をデッサン」することを目的に、「王者の孤独―御製にあらわれた明治天皇の生活と思想」を書いた（前掲

『論争』十九号三三二頁)。三木康至の「御製に現われた明治天皇の教育観」は、「御製を継統している間に、教育的見地から非常に深い興味をおぼえ、感銘を受けたものを摘録し、これを私なりの教育観から理解したところに従って(中略)天皇の教育観を探究しよう」と試みたものである(『東横学園女子短期大学紀要』第一号〔昭和三十七年二月〕九六頁)。村瀬春彌の「御製によって知り得る神道の倫理体系」は、「明治天皇の第一首より、叙景の御歌、一部の叙情の御歌を省き、また、まことの心や道そのものを総体的にお詠みになったものは多いがこれは除いて、また方法論的なものも除いて、個々の徳をお詠みになった御製の総てを取りあげ、御製に示されている道徳が、「敬神信仰の心」「世のため尽す心」「愛・和の心」「勤勉努力の心」の四つの徳目からなることを論証しようとしたものである(『神道宗教』第一五七号〔平成六年十二月〕五八―六〇頁)。筑波論文と三木論文は『新輯明治天皇御集』刊行前のものであり、村瀬論文は刊行後ではあるが、いずれも主として用いているのは、やはり御製数千六百八十七首の『明治天皇御集』であり、八千九百三十六首収載の『新輯明治天皇御集』を本格的に用いているわけではない。この点については、最新の研究の一つである前掲書『明治天皇』も同様である。

- (7) 木俣修『評論・明治大正の歌人たち』(昭和四十六年・明治書院)六三〇―一頁。
- (8) 『新潮45』平成七年一月号一八七頁/ドナルド・キーン「明治天皇 序章」。
- (9) 『中外日報』七月三十一日の紙面には、「御平癒あれかし。謹みて祈り奉る」という状況下の同二十八日記の「御聖徳」と題する一文が載り、御製十七首の謹解を試みている(『中外日報』七月三十一日三頁)。
- (10) 『時事新報』大正元年八月四・七・八・十三・十六・十八・十九・二十・二十一・二十二・二十三・二十七日はいずれも六頁、五・十二日はいずれも五頁。
- (11) 『国民新聞』大正元年七月三十一日五頁、八月二日五頁、六―十八日および二十―二十五日および二十七―三十一日はいずれも三頁、十九日と二十六日はいずれも二頁。
- (12) 『日本』大正元年七月三十一日五頁、九―十一日および十三―二十日はいずれも五頁。
- (13) 『東京日日新聞』大正元年七月三十一日六―七頁、八月一日四頁。
- (14) 『東京朝日新聞』大正元年八月五日七―八頁。
- (15) 『中外商業新報』大正元年七月三十一日一頁、八月二―三日はいずれも一頁。

- (16) 『都新聞』大正元年八月一三日のいずれも二頁。
- (17) 『読売新聞』明治四十五年七月三十日一頁。
- (18) 『中外日報』八月三日、十一日のいずれも三頁。
- (19) 『国民雜誌』第三卷十六号（大正元年八月十五日）表紙および七九～九三頁。
- (20) 『実業之日本』第十五卷十七号（大正元年八月十五日）一五六～六九頁。
- (21) 『地球』第一卷五号（大正元年八月）一一〇～九頁。
- (22) 『新日本』第二卷九号（大正元年九月）五三五頁。
- (23) 『大八洲』第一卷四号（大正元年十一月）二一五頁。
- (24) 『教育時論』第九八五号（大正元年八月二十五日）三二一～四頁。
- (25) 『中学世界』第十五卷十一号（大正元年八月）三四～五頁。
- (26) 『学生』第三卷九号（大正元年九月）一六～二一頁。
- (27) 『兵庫教育』第二七五号（大正元年九月）一五～二九頁。
- (28) 金光教本部『聖徳の無窮』（大正元年八月・金光教本部）二七、二九～三〇頁等。
- (29) 高桑駒吉『明治聖代志』（大正元年九月・大日本実業協会）三〇一～八七頁。
- (30) 須藤玄暉『明治天皇御伝』（大正元年九月・金尾文淵堂）一七二頁。
- (31) 『明治天皇聖徳録』（大正元年十一月・帝國圖書普及会蔵版）第三十編一～三三頁、第二十二編三六～五三頁。
- (32) 加藤玄智編『明治・大正・昭和 神道書籍目録』（昭和二十八年・明治神宮社務所）によれば、明治四十三年に歌道奨励会編『明治天皇御詠集』という書名の御製集が刊行されているという。ただ、明治時代に刊行されたものであるにもかかわらず「明治天皇」と冠せられていることに「但し果して明治四三年刊行ならば題名は明治に於ける天皇陛下の御詠集の意ならん」とその書名に疑義を呈している（一〇五頁）。
- (33) 『東京朝日新聞』大正元年八月二十日号には本書の広告が掲載され、そこには「大行天皇御製の世間に流布せるもの既に二百三百に達し六千万臣子之に抛りて弥高き御文徳の一斑を仰ぎ奉れるか本会は夙に九重の奥より漏出る御製の数々を拝写謹蔵し積て六百余首の多きに及び未だ衆庶の耳目に触れざるもの其大半を占む」として、従来未見の御製を多数収録した



旨が語られている。

(34) 『新公論』第二十七年九号(大正元年九月) 広告。

(35) 『明治大帝御画譜 附御逸事集』(大正元年八月・至誠社) 一四二―一三頁。

(36) 『中外日報』七月三十一日三頁。

(37) 『国民新聞』大正元年八月四日三頁。

(38) 『時事新報』大正元年八月七日六頁。

(39) 『時事新報』大正元年八月十五日六頁。八代が小冊子『眷々服膺』に収録していた十五首の御製は以下の通り。

初代よりうけし宝をまもりにてをさめ来にけり日の本つ国

国民のちからのかきりつくすこそわか日の本のかためなりけれ

あらし風ふせく夜もりのありてこそよのたみくさはゆたかなりけれ

をのか身をかへりみすして人のためつくすや人のつとめなるらむ

いかならむことにあいても撓ヒクまぬはわかしきしまのやまと魂

くろかね的射し人もあるものをつらぬきとほせやまとこ、ろを

国といふ国のか、みとなるはかりみかけますらを大和魂

あさみとりすみわたりたる大空のひろきを己かこ、ろともかな

さしのほる朝日のことくさわやかにたまほしきは心なりけり

とるさをの心なくそこきよせむかしまの小舟さはりありとも

ちよろつの民よこ、ろをあわせつ、国に力をつくせとそおもふ

波風のしつかなる日は船人も舵に心をゆるさ、らなん

弓矢もて神のをさめし国人はことなき世にもこ、ろゆるすな

国のためあたなす仇はくたくともいつくむへきことな忘れそ

われとわか心をりをりかへりみよしらすしらすも迷ふことあり

(40) 『時事新報』八月二十一日六頁。

- (41) 『少女画報』第一卷九号(大正元年九月) 四～五頁。
- (42) 『明治天皇御製謹解』(大正元年八月・実業之日本社) 自序二三頁。
- (43) 同前凡例、目次。
- (44) 同前一～二頁。
- (45) 同前一〇、四八～九頁、六〇～一頁。
- (46) 同前二二八、一四一～二、一七八頁。
- (47) 山田孝雄著『玉の御声』(大正元年九月・宝文館) 例言一頁。
- (48) 同前自序四頁。
- (49) 同前三四～六頁。また、「夏の夜もねざめがちにぞあかしける世の為思ふ事おほくして」の謹解の中で、山田は「夏の夜も」の「も」の一字を見逃すことなく、「も」字に無限の意あるを思へ。夏の夜は、明け易きものなれば、や、もすれば暁を知らざる程の候なり。かゝる短夜にも陛下は安寝し賜はざるなり。国事に大御心を用ゐさせ賜ふ事恐こしともいふ計りなきはこの御製にても感じ奉る」と国語学者らしい特徴を生かして深く緻密な御製の謹解を試みている(同書三〇～一頁)。
- (50) 同前四〇～一、五五頁。
- (51) 斎藤良次郎著『明治天皇御百首』(大正二年十二月・大坂毎日新聞社) 刊行の辞一、三、五頁。
- (52) 同前一九～二〇頁。
- (53) 『わか竹』第五卷十一号(大正元年十一月) から第七卷五号(大正三年五月) までの十七回の連載で、一回分が巻頭の二頁もしくは四頁であった。
- (54) 前掲『わか竹』第五卷十一号一頁。
- (55) 『國學院雜誌』第十八卷九号(大正元年九月) 一～三頁。こうした反省を踏まえ、同誌上で武島は「一、先帝の和歌につきて持たせられし御考」「二、先帝の御製の特質」「三、先帝の御製の比較研究」「四、英訳の先帝御製に就きて」の構成で論じる、としているが(三頁)、二を論じたところで連載は中断してしまっている。なお、武島が三で試みようとした歴代天皇と明治天皇との御製の比較研究については、和田英松が『時事新報』の連載「御和歌」の二十二回目(八月二十四日六

頁)と二三回目(八月二十六日六頁)で論じ(二十六日の分は三上參次と共同執筆)、『心の花』第十六卷九号(大正元年九月)でも「皇室と和歌」と題して論じている。

(56) 『わか竹』第六卷十二号(大正二年十二月)一―二頁。

(57) 『わか竹』第五卷十二号(大正元年十二月)二頁。

(58) 『わか竹』第六卷五号(大正三年五月)二頁。

(59) 前掲『國學院雜誌』第十八卷九号四頁。

(60) 『わか竹』第七卷五号(大正三年五月)一頁。